



〈一冊の本〉

複製 種蒔く人 原発行 種蒔き社
近代日本文学研究所編
ほるぷ出版1986年

48,000円

本研究所研究員 杉田憲道（会計学）



1970年代の半ば、私は東京・四谷で雑誌編集の仕事をしていましたが、ある先生の手原稿をいただきに隔月で鎌倉・稲村ヶ崎に通っていた。一年が過ぎた頃、いつもの「原稿とり」で玄関のドアを開けると、一升瓶を片手に廊下をウロウロと歩き回っている老人と目が合った。慌てて挨拶をすると「どう？君、コレ好きかね？」って、不揃いなちよび髭を生やした小柄な老人が愛想良く差し出した。この人物が雑誌『種蒔く人』の編集兼発行人の小牧近江先生（本名：近江谷駒）であった。それ以来、「原稿とり」の他に、時々、小牧先生の「真っ昼間からの酒の相手」という楽しい仕事も舞い込んだ。

『種蒔く人』は、1921年2月、小牧近江、金子洋文、今野賢三の3名を中心にまず秋田・土崎港にて創刊されたが、3号で停止になった（土崎版）。その後、小牧先生は、山川均先生に相談しながら東京版の発行を準備し、その目標について村松正俊、佐々木孝丸

と話し合った。「こんどは、第三インターを正面から打ち出すわけにはゆきません。村松も佐々木も、どちらかといえば、アナルキスト型だったからです。…ポリシェヴィキに組するものは少数でした。…私の肚はきまっていました。1918年5月、“グループ・クラルテ”が結成されたときの宣言を生かすこと、それならさし当ってボルもアナもない。こうしてでき上がったのが、東京版“種蒔く人”の“宣言”でした。」と、小牧先生は当時を回想した。（小牧近江『ある現代史—“種蒔く人”前後—』、法政大学出版局、1965年、73頁）

金子洋文は、“宣言”の冒頭にある「かつて人間は神を造った。今や人間は神を殺した。造られたものの運命は死ぬべきである」という文章がアナの立場であり、「僕たちは生活のために革命の真理を擁護する」という中段でアナとボルが手を握り、「“種蒔く人”はここにおいて起つ——世界の同志と共に！」とボルで結ぶことになったと、この“宣言”を評した。（井出孫六『ねじ釘の如く——画家・柳瀬正夢の奇跡』、岩波書店、1996年、156頁）

表紙カットも評判になった。「柳瀬正夢が思いきって“バクダン”を書いてくれました。見たところ“ザクロの実”です。でも中味は赤い。“世界主義文芸雑誌”は赤バンドをつけました。赤バンドは、創刊号の発禁で読者の目をひいたようです。これは、日本ではじめてのころみであり、岩波文庫などにも利用され、今日にいたっております。」と、小牧先生は胸を張った。（小牧近江、前出、77頁）

上記「原稿とり」のお相手は、小牧先生の長男で私の恩師・近江谷左馬之介先生であった。この親子は、俗物的な人間を徹底的に毛嫌いしたが、そこには確かに『種蒔く人』の精神があった。同雑誌とともに、上掲2冊の本も読者の皆さんにお薦めしたい。